



真夜中の世界樹教団本部…
教主の部屋のベッドに
二人の姿があった。

「よしよし、今夜も
よく来てくれたね。
ヨミ。」

「教主さまの
ご希望であれば、
仕方ありませんが…
こうも連日ではその、
流石に私も…」

ポキ

ポキ

グワン

教主は彼女の小さな穴へ
人差し指を近づける。
「でも、そのおかげで
この穴も入れやすく
なっただろう？」
○穴へ、私は2本めの
指をねじ入れた。

あゝ
ガッ

アッ
アッ
アッ





ムネに♡

グイ

グググ

グググ

グググ

「はは、私のモノを毎晩啜えこんでるだけあるね。よく伸びる。」
「うっ、言わないでくださいっ!」
2本の指でかき回し、上に引き上げるとヨミの女性器はよだれを垂らしつつその口を開けた。



トキ♡

トキ♡

キッ♡

ビキ

ビキ

「とはいえ、私もヨミが嫌な事はしたくないし...今日はやめてもいいよ。」

「や、やめないでください!! 教主さまの大きすぎる男性器で、わたしの中を突いてほしいんですっ♡」

教主様は、答えがわかっていて私に意地悪をしてくれます...

「よしきた！
今日もガンガン
突いてあげるからね！」
教主の野太い肉棒を
突っ込まれた彼女の腹部は、
顔にぶつかっていきなほどに
盛り上がりつつあった。

グゴッ

カッ

ズッ

カッ



「お、ぐうっ♡
どう、ですかあっ♡
教主、さまあ♡
わたし、ちゃんと
お慰め、
できてますかあっ？」

「ああ、
ヨミのお腹、
私のチ○ポを
キツキツに締め付けて
最高に気持ちいいよ。」

ほとんどオナホのような
扱いはされても、
彼女は健気に私との
性交を悦んでくれる。

あ♡

ズッ

あ♡

ボッ

ズッ

ズッ

ズッ





「私も同じだよ。
今日はヨミが
気絶するくらい
念入りに中出しして
あげるからね。」

「うっ♡
う、うれしいうっ♡
わたし、
教主さまの熱い
子種っ注いでほしいっ♡
ですっ♡」

ゴッ♡

ドッ♡

ゴッ

ドッ

ゴッ

ドッ



「はあ...はあ...はあ...
すごい量...♡
教主さまの愛が、
こんな...♡」

「まだまだ。
今夜は私の限界まで
中出ししてあげるから、
心しておいてね。」

はあ...

はぁ♡

ポテ...

ドッポ...

ブビビ...



はしゃー...♡

ダイブン...

「ふう...。流石に出しすぎたか。今夜はこのくらいにしておこう。」

「はふ...♡ あ、ありがとうございます...♡」

彼女の腹は、まるでメロンが満月のように丸く膨れて、今にも破裂しそうなほどの大きさになっていた。

ん...♡

ゼー...♡

ダイブ...

ダイブ...

ダイブ...





「このままじゃ苦しいだろっ？全部綺麗に出しておこうね。」

肉棒を引き抜いたヨミの〇穴を指で広げると、出した精液が噴水のように溢れ出した。

「あーあ、思ったより飛び散ったな。クレープに掃除させないと...。」

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ





















